アウグスティヌス『告白』の時間論

――人間学的側面からの再構成

新潟大学　人文学部
行動科学課程　人間学履修コース
佐藤 茉莉

指導教員　城戸 淳
平成 23 年 1 月 11 日

目次

序章

第一章　運動と時間

　第一節　「物体の運動＝時間」の否定――アリストテレスの時間論との比較

　第二節　「物体の運動＝時間」の否定

　　――「天体の運動＝時間」の否定／時間によって運動を測る

第二章　三つの時間とその計測

　第一節　過去・未来の非存在と現在中心主義

　第二節　計測の不可能

　第三節　解決策――過去・未来の在り方

第三章　時間はなにによって測られるのか

　第一節　魂（anima）のうちで測る

　　――幅を持たない時間の解決、刻まれた印象（impressio）

　第二節　魂（anima）で測るということの問題点とその解決

序章

本論文では、アウグスティヌス『告白』第十一巻第十一章から第三十章までで述べられている時間論を扱う。『告白』は、397 年から翌年にかけて書かれたアウグスティヌスの自伝であり、青年時代の罪の告白、回心に至る経歴と体験が書かれている。時間論としては、第十一巻第十章において、「神は、天地創造以前に何をしていたか」という、人々の誤謬に満ちた問いに対する返答を試みることがきっかけとなり、第十一章から第三十章まで、アウグスティヌスの時間に対する考えが述べられている。第十四章では、アウグスティヌスの時間論を語るときに誰もが引用するであろう、「それでは時間とは何であるか。だれもわたしに問わなければ、わたしは知っている。しかし、だれか問うものに説明しようとすると、わたしは知らないのである」[1]という有名な言葉が述べられている。この言葉は、否定的なものではなく、時間について深く考察し、生涯悩みぬいた人物であるからこそ言える言葉である。

我々にとって時間とは、大変身近であり、熟知されていると思われるかもしれない。現に、我々は日常の会話の中で、時間について理解して語るし、他人が時間について語っても、それを理解して聞いている。しかし、「時間とは何か」その本質についていざ質問されたら、誰も容易に答えることはできない、それどころか、それを言葉にするために、頭の中で思惟にさえも捉えることができない、とアウグスティヌスは指摘している。

中山康雄は、このアウグスティヌスの文に使われている「知っている」という言葉には、二つの意味があると分析した。第一の意味は、「理解している」という意味で、「概念を適切に使用できる能力を持っている」ことであり、第二の意味は、「説明できる」という意味であると述べている。[2]このように「知っている」という言葉を二義的に捉えると、アウグスティヌスが我々にどのようなことを伝えたかったのか、よりよく理解することができる。我々は時間を、第一の意味では知っているといえるが、第二の意味では知らないのである。つまり我々は、時間という概念を理解し、適切に使用することはできるが、それを思惟に捉え適切に説明することはできないのである。

アウグスティヌスの著作は、彼自らがキリスト教父として、神の導きを得て真理を追究するという形式で書かれているため、多くの神学的要素が含まれている。『神の国』で述べられている時間論に比べ、『告白』で述べられている時間論は、神学的考察が少なく、人間学的考察が多くなされているが、まだ宗教的問題の枠の中で展開されている。

---

[1] Confessiones XI.14　quid est ergo tempus? si nemo ex me quaerat, scio ; si quaerenti explicare velim, nescio

[2] cf.『時間論の構築』（29 頁）

まず、アウグスティヌスの時間論の神学的な枠組を簡単に説明しておく。前述した「神は、天地創造以前に何をしていたか」という問いに対し、アウグスティヌスは、時間自体が、天地創造とともに神により創造されたものであるので、天地創造「以前」という捉え方自体が誤謬に満ちていると答えた。あえて答えるのなら、天地創造以前は、無の状態であり、神は、天地創造以前には、なにものも創造しなかった、となるであろう。一般的に、時間が存在しないところに、その間何をしていたかという問いは無意味である。

神は時間を創造したが、神の世界に時間はない。時間は、我々人間の世界に創られた。神の世界には、「つねに現在である永遠性」semper praesentis aeternitas があり、人間の世界には、「時間と変化」tempus et mutatio がある。このような神学的な天地創造の議論などは、無視できるものではなく、また、大変興味深いものである。

しかし、神学的な枠組みについては、それ以上分析不可能なことが多いので、本論文では、神学的な枠組みについて考察するのではなく、分析の余地が多くあると思われる、アウグスティヌスが考える人間の世界の時間を、人間の心の動き、人間の魂の内部に注目し、人間学的立場から考察する。アウグスティヌスの時間論の人間学的側面に着目するので、人間の世界に創られた「時間と変化」だけを扱い、あえて、神学や前後のコンテクストから引き離して、独立の時間論として再構成することで、アウグスティヌスが人間の世界での我々の時間、つまり我々人間に現れるものとしての時間について、どのような考えを持っていたのか明らかにしたい。アウグスティヌスは、人間の存在と時間の関係性についてについてどのように考えていたのであろうか。

第一章　運動と時間

第一節　「物体の運動＝時間」の否定――アリストテレスの時間論との比較

アウグスティヌスは、「時間とは何か」その本質を問い、答えを出そうと試みるが、前述したように、第十四章にて、その本質はまったく理解できない、思惟にさえも捉えることができないとされ、問題は放棄されている。アウグスティヌスがこのように考えているのに対し、一方では、「時間は物体の運動である」と考える哲学者も存在する。この章では、「物体の運動＝時間」の否定をテーマに、アリストテレスの時間論との比較、そして「天体の運動＝時間」の否定について考察し、アウグスティヌスが述べている、時間によって運動を測っているということの証明を行う。

アウグスティヌスは、時間の本質そのものは到底理解し得ないものであるとした。そこで、時間という概念はどのように我々に認識されるのかを考えた。詳しくは第三章にて論じるが、アウグスティヌスは、時間は魂のうちで捉えられるものであるとしている。一方、アリストテレスは、時間は物体の運動の数であると捉えている。そこで第一節では、アリストテレスの時間論と比較しながら考察する。アリストテレスは、「物体の運動＝時間」であるとは考えていないが、時間は運動の数であると考えている点に焦点を当てて、アウグスティヌスの議論と対比していく。

比較する前に、まずアリストテレスの時間論について説明と考察をする。アリストテレスはまず、時間は転化[3]なしにはありえないと述べている。

> 「われわれ自らが自らの思想をすこしも転化させないとき、あるいはそれが転化していてもこれに気づかないでいるときには、われわれには「時がたった」〔時間が経過した〕とは思われないからである……」[4]。

記憶喪失などで、途中の記憶を失った場合、また、広い意味では、睡眠をとって目覚めたとき、我々には、その間は時間が止まっていたように感じられ、時がたったことは感じられない。これはその期間中に魂のうちで転化が起こらなかったことにより、眠る直前、記

---

[3]アリストテレスによれば転化とは、(1) 生成と消滅、(2) 変化、(3) 増大と現象、(4) 移動である。このうち、(2)、(3)、(4) が運動であり、それぞれ、性質に関する運動、量に関する運動、場所に関する運動である。(cf.『アリストテレス全集 3』437 頁) よって、変化や運動、魂の動きなども転化の一種である。

[4] アリストテレス『自然学』(168 頁)

憶を失う直前の今と、目覚めた直後の今を直結して考えるためである。よって、時間は転化なしにはありえないのである。

また、「転化はより速くあったり遅くあったりするのに、時間はそうでない」[5]とも述べている。運動などの転化は、速くなったり遅くなったりするが、時間の進みが速くなったり遅くなったりはしない。というのも、速い・遅いは時間によって決定されるからである。よって、運動は、転化の一種であるので、アリストテレスは「物体の運動＝時間」であると考えているわけではなく、時間によって運動を測っていると考えているということになる。

しかし、アリストテレスは、「……われわれが「時がたった」というのは、われわれが運動における前と後の知覚をもつときである」[6]と考えている。時間がたったと感じるためには、運動の前後の差を知覚することが不可欠ということである。ゆえに、時間を感じるには運動が必要である、時間は運動なしには存在し得ない、運動に付随するものであると考えている。

アリストテレスは、この運動における前と後の知覚を、運動の数と表現した。「……時間とはまさにこれ、すなわち、前と後に関しての運動の数なのである」[7]。運動の前後とは、数のことであり、時間とは、運動を数える数なのである。ところで、数を数えるということは、数える主体、すなわち魂が必要である。つまり、魂の関与がなければ、時間は存在しないと言うことができる。すぐ後にも述べるが、ここで仮に、運動だけが存在し、魂が存在しない（関与がない）としたら、時間は存在しない。運動は、魂なしにも存在するが、時間は、魂なしには存在しないのである。一方、それとは反対に、魂だけが存在し、運動が存在しない場合はどうなのであろうか。

> 「……それが暗闇であって、肉体〔感官〕を介してはなにものもわれわれに感じられないような場合でも、何らかの動き〔運動〕がわれわれの霊魂のうちに起こりさえすれば、直ちにまたそれと一緒に〔同時に〕なんらかの時間も経過したと思われる……」[8]

世界（物体の運動）は静止しているが、魂の動きだけがあるとしたら、そこには時間が存在するということがいえる。なぜなら、魂の動きも転化（運動）の一種であるし、魂のうちに何らかの運動が起こりさえすれば、何らかの時間も経過したと感じられるからである。

そして、「……霊魂が存在しないかぎり、時間の存在は不可能であろう、そしてただ時

---

[5] アリストテレス『自然学』（167 頁）
[6] アリストテレス『自然学』（170 頁）
[7] アリストテレス『自然学』（170 頁）
[8] アリストテレス『自然学』（169 頁）

間の基体たるもの〔運動〕のみが〔時間なしに〕存在するであろう……」[9]とも述べている。すぐ前でも述べたが、つまり、運動は時間なしでも存在するが、時間は運動なしでは存在しない、と考えている。時間は、我々にとって、運動を数える単位としての記述の道具であり、運動と同じような意味では実在しない。アリストテレスは、時間は、運動の存在によって初めて意味を持ち、運動を観察するものにより把握されるものであると考えた。

では、アリストテレスとアウグスティヌスの時間論を比較し考察する。まず、時間は転化なしにはありえないとアリストテレスは考えているが、アウグスティヌスの場合はどうであろうか。詳しくは第三章にて論じるが、アウグスティヌスは、魂のうちに印象を刻み込むことによって時間を認識していると考えているので、印象が発生しなければ、時間は感じられない。発生・生成というのは、転化の一種なので、この点については、アリストテレスはアウグスティヌスと同じ考えであるといってよいであろう。

つぎに、アリストテレスにとって、時間とは、運動を数える単位でしかないのであるが、この点は、アウグスティヌスと大きく異なっている点である。われわれの主体的な関与、すなわち魂がなければ時間は認識されえないという点では、確かにアウグスティヌスと同じ考えであるといえる。しかし、アリストテレスの場合、直接把握されるのは、運動であり、時間は、その記述の道具として付随するだけである。これに対し、アウグスティヌスは時間こそが先にあり、時間のうちで運動が行われていると考えた。

アリストテレスの時間論は、魂の存在がなければ、時間は存在しないものの、彼が言う時間は、運動を記述する道具としての時間なので、さほど人間存在と深く関係したものではない。それに対しアウグスティヌスの時間論は、時間を徹底的に過去・現在・未来という概念から考えていて、人間の存在、魂に多分に依存している。中山康雄は、「アリストテレスは、運動を記述するための枠組みとして時間を捉えた。これに対し、アウグスティヌスは、人間に現れるものとしての時間を記述している」[10]と述べているが、アリストテレスは、運動という物理現象を記述するという、ある意味外的なもののための時間を考えたが、アウグスティヌスは、まず神の時間と人間の時間を区別し、その上で、人間の内面に現れる、記憶（memoria）、期待（expectatio）、直観（contuitus）などの内的な時間を考えたといえるであろう。観察する主体がなくてはならないという根本と、時間によって運動を測っているという考えは同じでも、双方の考え方は、まったく異なったものとなっていることがわかる。

第二節　「物体の運動＝時間」の否定――「天体の運動＝時間」の否定

[9] アリストテレス『自然学』（186 頁）
[10] 『時間論の構築』（31 頁）

アウグスティヌスは、「物体の運動＝時間」の否定を試みるために、天体の運動とろくろの回転の仮想実験の例を挙げて説明している。古くから、天体の運動は、時間を表すものとして考えられていて、古代の人々は、太陽や月の動きで時間を把握してきた。だが、アウグスティヌスは、日や月や星などの天体が、とりもなおさず時間であるという哲学者を批判し、もしも、天体の運動が休止し、ろくろのみが回転しているとしたら、その回転を測る時間はなくなるのか、と問題を提起した。

「じっさい、もしも天上の発光体が休止して、ただ陶芸のろくろのみが回っているなら、それらの回転を測る時間はなくなるのであろうか」[11]。

太陽、月、その他の星などの動き（実際には地球の自転によるものである）が、休止したとして、陶芸のろくろのみが回転し続けているとする。このような状態のとき、もし天体の運動そのものが時間であるなら、ろくろの回転を速い・遅いというように語ることはできなくなるはずである。なぜなら、天体の運動が休止しているということは、つまり時間が休止しているということなので、ろくろの回転を測る時間がなくなり、速い・遅いなどということができなくなる。しかし、もちろん我々は、そのような状態でも、一定の速さで回転しているであるとか、だんだん減速して最後には動きが止まったとかいうことができるであろう。これは、時間について語ることができているといえるであろう。よって、天体の運動が休止しても時間はあるといえるのではないだろうか。

また、我々は、日が昇ってから再び上るまでの全周行を一日と呼ぶが、仮にその全周行がわずか一時間の長さで完了したとしたらどうであろうか。アウグスティヌスは、それは一日とは言えないと考えている。

「まず、運動そのものが一日であるなら、たとえ日がわずか一時間のうちにその周行を完了することがあっても、それは一日であるであろう。つぎに運動が行われている間が一日であるなら、日が上ってからつぎに上る間までわずか一時間という短い間であるとき、それは一日ではないであろう。完全な一日であるためには、日は二十四回周行しなければならないであろう」[12]。

---

[11] Confessiones XI.23　an vero, si cessarent caeli lumina et moveretur rota figuli, non esset tempus, quo metiremur eos gyros

[12] Confessiones XI.23　si enim primum dies esset, dies ergo esset, etiamsi tant spatio temporis sol cursum illum peregisset, quantum est horae unius. si secundum, non ergo esset dies, si ab ortu solis usque in ortum alterum tam brevis mora esset, quam est horae unius, sed viciens et quarter circuiret sol, ut expleret diem.

もしも、日の全周行が一時間で完了するということが起こったとしても、我々は、「今日は、一日の長さが、ずいぶん短かった」などということができるであろう。ところがもし、天体の運動そのものが時間であったのなら、日の周行がどんな速度で完了しても、たとえば、わずか一時間で完了したとしても、それは、同じ一日という時間であり、そもそも我々に長さの違いは感じられないのではないだろうか。このような考察から、アウグスティヌスは、我々は時間によって日の周行を測っている、つまり、時間によって天体の運動を測っていると考えた。よって、たとえばもし、日の全周行が十二時間で完了したなら、「今日は一日がいつもの半分の時間である」というように言うことができる。

アウグスティヌスは、以上の考察により、時間によって天体の運動を測っていると考えた。しかし、このアウグスティヌスの二つの思考実験では、天体の運動や日の周行だけが、止まったり、速くなったりするだけであって、世界のほかのすべての運動はそのままの速度で継続しているという前提条件が隠れている。このような状況の場合、アウグスティヌスの導き出した結果になるのは、いわば当然のことである。なぜなら、天体の運動や日の周行と、世界のほかのすべての運動を比較すればよいだけであるからだ。そこで仮に、次のような質問をアウグスティヌスになげかけた場合、彼はどのように答えるのであろうか。

（1）天体の運動にあわせて、ろくろの回転、すなわち世界のすべての運動が休止した場合、我々は時間について語ることができるのか。

（2）日の周行にあわせて、世界のすべての運動の速度が同じように速くなった場合、我々はまだ、日の周行が速くなったと言うことができるのか。

まず、(1) の場合でもアウグスティヌスは、時間について語ることができると答えるであろう。アウグスティヌスは、時間の計測について次のように述べている。

「……わたしたちはその運動のみではなく、その静止をも時間によって測って、「それは運動した長さだけ静止していた」とか、「運動した二倍、あるいは三倍の長さだけ静止していた」とか、その他わたしたちの測定が確定したところの、あるいはいわゆる大体推定したところの結果を述べるのである」[13]

我々は、音が鳴っている間だけでなく、音がなっていない期間も測ることができる。アウグスティヌスが述べているように、我々は静止の時間も運動の時間と同じように、どのくらい長いかを把握することができる。運動のような積極的現象がみられなくても、静止し

[13] Confessiones XI.24 dicimus: “tantum stetit, quantum motum est” aut: “duplo vel triplo stetit ad id quod motum est” et si quid aliud nostra dimensio sive conprehenderit sive existimaverit, ut dici solet plus minus.

た世界を認識している魂がある限り、時間はなくなることはない。

するとこれは、第一節で挙げたアリストテレスの、世界（物体の運動）は静止しているが、魂の動きだけがあるとしたら、そこには時間が存在するという議論と同じなのではないか。結論から述べると、結果は同じであるが、結果にたどり着く過程が双方で異なっている。アリストテレスの場合、魂の動きを運動であると捉え、転化があることにより、時間が存在すると考え、あくまでも運動の実在性を唱えた。しかし、アウグスティヌスの場合は、魂のうちに時間が存在するので、魂がある限り、ほかのすべてが静止していても時間は流れているという考え方によるものである。

では、「わたしたちの測定が確定したところの、あるいはいわゆる大体推定したところの」[14]とは、どのようなことを示しているのであろうか。これは、時間を計測するための我々の基準のことであり、アウグスティヌスは、この基準を魂の拡がり（distentio animi）であるとしている。

つぎに、(2) であるが、この場合も（1）の場合と同様で、我々は、魂のうちで基準を持ち、時間を認識しているので、たとえ世界のすべての運動の速度が日の周行にあわせて速くなったとしても、魂は別のものに変わることなく同じ魂であるので、魂のうちでは、そのままの時間が継続して動いている。よって、その魂のうちの時間によって、世界のすべての運動の速度が速くなったと感じることができるであろう。

よって、以上第一節、第二節の考察によって、運動そのものが時間なのではなく、運動は時間のうちで行われることがわかった。よって、我々は、時間によって運動を測っていて、運動は、時間のうちで行われるということができるのである。

[14] 上に同じ

第二章　三つの時間とその計測

第一節　過去・未来の非存在と現在中心主義

時間とは、一般に現在・過去・未来に分けられる。しかし、アウグスティヌスは、現に存在するのは常に現在のみであると考えている。「じっさい、過去はもはや存在せず、未来はまだ存在しないからである」[15]。これはどういうことかというと、つまり、アウグスティヌスは、ある現在の時点で、あることが過去であるのならば、それは存在しない、また、あることが未来であるのならば、それは存在しないと考えている。なぜかというと、過去はもうすでに過ぎ去って消えてしまっていて、また未来はまだ到来していなく、経験していないからである。つまり、現在の時点では、わたしの誕生という過去の出来事はもう過ぎ去っているので、存在しない。また、わたしの死という未来の出来事もまだ到来していなく、経験していないので、存在しないということである。そして、現在の時点で存在するのは、まさに今この論文を書いているわたしだけなのである。

さらに、アウグスティヌスは、「……存在するすべてのものは、どこに存在しようとも、ただ現在としてのみ存在する」[16]のであると述べている。つまり、過去がまさに現在であったその時点でも、もちろん存在するのは現在のみである。ということは、過去も、まさに過ぎ去っているその時点では、過去ではなく現在として存在するということが成立していたのである。また、未来についても同様で、未来がまさに現在となるその時点でも、もちろん存在するのは現在のみである。よって、未来もいずれ到来し、まさに過ぎ去っているその時点が来たときには、未来ではなく現在として存在するということが成立するようになる。過去も未来も、我々が体験しているその時点では、紛れもない現在である。わたしの誕生は、かつては現在であり、存在するということが成立していたし、わたしの死はいずれ現在となり、存在するということが成立するようになるのである。そして、今この論文を書いているわたしは、いずれ消え去って存在しないものとなる。

このように、過去や未来も、それ自身が現在となる時点では、現在として存在するのである。しかし、また時間が経過し、現在として存在するということが成立していた時点が過ぎ去ると、たちまち過去となり、存在しなくなる。つまり、過去は、それが現在であったとき、存在するということが成立していたし、未来は、それが現在となるとき、存在するということが成立するようになる。しかし、その時点において、過去や未来であった場合は、過去はもう存在せず、未来はまだ存在しないのである。このような考えは、後に現

---

[15] Confessiones XI.15　praeteritum enim iam non est, et futurum nondum est.
[16] Confessiones XI.18　ubicumque ergo sunt, quaecumque sunt, non sunt nisi praesentia.

在中心主義と名づけられている。

アウグスティヌスは、このように、過去・未来の非存在を唱えた。アウグスティヌスによれば、神は、過去・現在・未来を同時にすべて見ることができるが、人間にとっては、現在だけしか存在しない。ここで一つ疑問が生じてくる。未来については、我々もまだ経験していないことであるので、何もない、まだ存在しないという考え方にもさほど違和感はないように感じるであろう。しかし、過去が存在しない、すなわち過去になったその瞬間に存在しなくなるというのは、どのようなことであろうか。アウグスティヌスが過去はもうすでに存在しないとしたその背景にはどのような考え方があったのであろうか。

先ほどの例で考えてみる。わたしの誕生は過去であるので存在しない。そうであろうか。わたしは現にここに生きているのであって、わたしの誕生が存在しないのであるなら、わたしも存在しないはずではないだろうか。つまり、わたしの誕生は存在したのである。しかし存在したというと語弊がある。わたしの誕生が存在するということが過去に成立していたという事実が存在するのである。わたしの誕生という出来事そのものは、今現在は存在しないが、わたしの誕生が存在するということが過去に成立していたという事実は、今でも存在するのである。

過去を、わたしの誕生などのように具体的な出来事、幅がある時間で考えなくても同じである。我々のように時間の中に生きるものは、一瞬たりとも過去にさかのぼることはできない。なぜなら、一瞬前という時間は、過去であるので、もう存在しないからである。極端に言えば、一瞬前のわたしはもう存在しないし、本一冊にしても、現在目の前にあるのは、現在の本であって、一瞬前の本ではない。一瞬前の本はもうすでに過ぎ去ってしまい、この世界には存在しないからである。

この考えは到底納得できるものではないであろう。このままでは、世界はバラバラであって、我々は持続した知覚を持つことは不可能なのではないか。しかし、我々の知覚は持続し、次々に別のものになるのではなく、今あるものと先ほどあったものは同じもので、時間が過ぎ去ったと感じることができる。これはどのような作用によるものであるのだろうか。第三節以降で明らかにしていく。

第二節　計測の不可能

第一節より、過去・未来は存在しない。これにより、もちろん存在しないものを計測して長い・短いなどということはできない。よって、過去・未来の時間は計測することができない。しかし我々は日常、「病院の待ち時間が長かった」「この仕事は長くかかるだろう」などと、過去・未来の時間の長さについて述べる。このような場合、アウグスティヌスは、過去の時間が長かった、未来の時間が長かった、というのではなく、過去のことであって

も未来のことであっても、「……あの現在の時間が長かった……」[17]（あるいは長くあるであろう）というべきであるとしている。なぜかというと、「それはただ現在であったそのとき、長かったからである」[18]。もう過ぎ去ってしまったり、まだ到来していなかったりした場合は、存在しないので、長くあることはできない。

だが現在は存在するので長くあることができるのではないか。我々が体験していた（体験するであろう）その過去・未来は、体験しているその時点では過去や未来ではなく、紛れもない現在であった（現在である）のである。そして、過ぎ去って、現在でなくなり、過去となったときには、もう存在しないし、まだ現在にならず、到来していない未来であったときは、まだ存在しないのである。

ここまでの考察では、現在は計測できると想定して議論しているが、では実際に現在の時間は計測できるのであろうか。アウグスティヌスはできないとした。時間を計測するには、その時間がある一定の長さをもっていなければならない。そこでアウグスティヌスは、現在という時間が長くありうるかどうかを考察した。

アウグスティヌスによれば、百年が現在でありうるかどうかを考察すると、最初の一年が経過しているとき、その一年は現在であるが、他の九十九年は未来である。第二年が経過しているとき、最初の一年はすでに過去であり、次の一年は現在であり、他の年は未来である。このように、百年は現在であることはできない。同じように分析していくと、たとえ一日を現在でありうるか考察してみても、同じように過去と未来に分かたれるので、現在という時間はただ一日の長さももたないということがわかる。[19]

このように、現在は、「……大急ぎで未来から過去に飛び移るのであるから、束の間も伸びていることができない。もし少しでも伸びているなら、それは過去と未来に分かたれる……」[20]と、アウグスティヌスが述べているように、現在とわれわれが呼んでいる中の、すでに経験したものは、直ちに過ぎ去り過去となり、これから経験するものは、未来となるので現在という時間は長くはありえない。我々が普段考えている、長さを持つように見える現在というものは、分析的なものではなく、思考による産物であるのだ。

アウグスティヌスは、我々が時間を計測できる条件について、次のように述べている。

(1)「……わたしたちがそれを知覚することによって測るのであるから、ただ現に過ぎ去っている時間のみを測るのである」[21]。

(2)「もしもわたしがその物体が運動しはじめるのをみないなら、またそれがいつまで

---

[17] Confessiones XI.15　longum fuit illud praesens tempus
[18] Confessiones XI.15　quia cum praesens esset, longum erat
[19] cf.Confessiones XI.15
[20] Confessiones XI.15　quod tamen ita raptim a futuro in praeteritum transvolat, ut nulla morula extendatur
[21] Confessiones XI.16　sed praetereuntia metimur tempora, cum sentiendo metimur

も運動しつづけて運動を止めるのをみないなら、私はそれを測ることはできない。」[22]

（1）は、我々は、現に過ぎ去っている時間のみを計測できるということである。(2)は、物体の運動の始点と終点を知覚しているときのみ、時間を計測できるということである。アウグスティヌスはこのように、時間は、現に過ぎ去っているときかつ、その始点と終点を知覚していなければ計測することはできない、と考えている。

この考えを検証してみると、我々は知覚することによって、時間を測るので、すでに存在しない時間や、まだ存在しない時間は知覚できないため、測ることはできない。よって、知覚できる、現に過ぎ去っている時間だけを測ることができるといえる。また、始点と終点を知覚していなければ、長い間物体の運動を見ていたとしても、いつ始まったか、またはいつ終わるかがわからないので、それが長いということはいえるが、どのくらい長いかを測っていうことはできないであろう。そのため、物体の運動の始まりと終わりを知覚することが不可欠である。よって、アウグスティヌスのこの考えは、時間を測る上で、もっともな考えであるということがわかった。

これまでの考察により、過去・未来は存在しないので、現に過ぎ去っているものでない上に、始点と終点も知覚できない。また、現在も幅を持たず、一瞬のうちに過ぎ去ってしまい、もはや過去になってしまうので、現に過ぎ去っているときに計測することは不可能であり、始点と終点を知覚することもできないということがわかっている。以上のことを、先ほどのアウグスティヌスの時間を計測できる条件にのっとって考えると、過去・現在・未来は、計測することができない。よって、アウグスティヌスの考えが、時間を測る上で、もっともな考えであるということと同時に、これにのっとって考えた場合、過去・現在・未来は、計測することができないということがわかっているので、時間は計測できないという結論が出る。

しかし、アウグスティヌスの時間を計測できる条件の（2）について、よく考えてみると、アリストテレスが、時がたったと感じることができる条件としてあげた、「……われわれが「時がたった」というのは、われわれが運動における前と後の知覚をもつときである」[23]と同じことを言っているのではないのか。第一章でも述べたが、アリストテレスはこの条件をもって、運動が存在しなければ時間は存在しないという考えを導き出した。両者の言っていることが同じであるなら、アウグスティヌスも、アリストテレスと同じように、運動が存在しなければ時間は存在しない、時間は運動に付随するものであると考えていることになってしまう。だが、アウグスティヌスは時間こそが先にあり、その中で運動

---

[22] Confessiones XI.24　et si non vidi, ex quo coepit, et perseverat moveri, ut non videam,cum desinit,non valeo metiri, nisi forte ex quo videre incipio, donec desinam.

[23] アリストテレス『自然学』（170 頁）

が行われると主張している。両者が挙げたこの条件は、どこが違うのであろうか。

まず、この二つの条件は非常に似通っているが、アウグスティヌスは、(2) をあくまでも「物体の運動の時間を計測できる」条件としてあげているのであり、「時がたったと感じることができる」条件としてあげているのではない点に注意しなくてはならない。つまり、(2) は、厳密に言うと、ある物体の運動を計測するためには、その物体の運動の始点と終点を知覚しなくてはならないという物体の運動の計測が前提にあるので、運動がなくてはならないのは当然である。

一方、第一章でも述べたが、我々は静止の時間をも、運動の時間と同じように、魂の基準によって、大体どれくらいの長さであったか推測することができ、アウグスティヌスは時間の計測にも、時がたったと感じるためにも運動を必要としていない、我々は運動を測ることによって時間を感じているのではないと考えている。よって、この両者の条件を並べて、どちらも同じことを言っているのであるから、アウグスティヌスは運動が存在しなければ時間は存在しないと考えていることになるのではないかと考えるのは間違いなのである。

第三節　解決策――過去・未来の在り方

第一節で述べたように、アウグスティヌスは、存在するのは現在だけであるという現在中心主義をとっている。現在中心主義では、存在するのは現在だけなので、過去・未来は存在しない。よって、存在しないものについて語ることはできないので、過去・未来について、我々は何も語ることはできない、または、何か語ったとしても、それは妄言になってしまうということになる。そうであるにもかかわらず、我々は日常、過去や未来について、妄言などではなく、当然のことのように語ることができる。そこで、アウグスティヌスは、この矛盾を回避するために、過去・未来を別の姿で現在のうちに捉える、という解決策をとる。過去は記憶（memoria)、未来は期待（expectatio）として現に存在するとした。

『告白』は、序章でも述べたように、自らの過去を回想する形式で書かれたものであるが、アウグスティヌスは、自らの少年時代の回想を例に挙げて説明している。

「じっさい、もはや存在しないわたしの少年時代は、過去という時間のうちにあって、その過去はもはや存在しないのであるが、しかしその心象は、わたしが少年時代を回想して語るとき、現在という時間において見られるのである」[24]。

[24] Confessiones XI.18　pueritia quippe mea, quae iam non est, in tempore praeterito est, quod iam non est ; imaginem vero eius, cum eam recolo et narro,

自らの少年時代そのものは、もう過ぎ去ってしまい、現に存在しない。しかし、かつてその少年時代を現在として経験していたときに、自らのうちに刻み込んだ心象は、少年時代を回想するときに、記憶として現在に存在するのである。この記憶の作用がなかったら、第一節で問題になったように、次々新しい世界が入ってきては消えての繰り返しで、世界はバラバラで、我々に持続した知覚はなくなってしまう。

また、未来についても、次のように述べている。

「……未来のものが見られるといわれるとき、それはまだ存在しない。すなわち将来存在するもの自体が見られるのではなく、おそらくそれらのものの原因または兆候が見られるのであろう」[25]。

我々は、まだ存在しない未来について、あたかも存在するかのように語ることがある。たとえば、「明日は 15 時から会議がある」と言う。この場合、明日の会議は、まだ存在しないので現に見えているわけではない。しかしその兆候（上司に告げられた、同僚と予定を立てたなど）が、期待として現に存在するのである。

このような仕組みによって、我々は、過去の経験はもう存在しないが、それが過ぎ去るときに痕跡として残された記憶が存在することにより、過去の経験について語る、すなわち過去物語が可能となる。また同様に、未来の経験はまだ存在しないが、現在にその兆候や意思などの期待が存在することにより、未来について語り、未来の予言をすることが可能となる。

ここでまた疑問が出てくる。過去は、記憶として現に存在するとあるが、忘れたものについては、どうなるのであろうか。忘れたものは、記憶として残っていないので、完全に存在しないということになるのであろうか。

たとえば、ある男性が、電車に乗っていて財布を自分の座席の隣に置いたとする。彼はそのことをすっかり忘れてしまって電車から降りてしまったとする。彼は財布を置いたことを忘れただけで、財布を自分の座席の隣に置いたという出来事が存在するということが過去に成立していたことには変わりはない。しかし、過去は、記憶として現在に存在するという働きがなかったら、存在することはできない。財布を置いたという出来事自体はもう過ぎ去ったことであるし、彼がその出来事を忘れてしまって彼の記憶にないのであるなら、それはどこにも存在しないということになってしまう。それでは、彼が財布を自分の座席の隣に置いたという事実はなかったことになるのであろうか。

---

[25] Confessiones XI.18 in praesenti tempore intueor, quia est adhuc in memoria mea. cum ergo videri dicuntur futura, non ipsa, quae nondum sunt, id est quae futura sunt, sed eorum causae vel signa forsitan videntur

アウグスティヌスはキリスト教父であるので、こう答えるかもしれない。神は、すべてを知り、把握しているので人間が忘れたとしても、神はすべてを見ているので存在しないことにはならない、と。しかし、本論文では、神学的にではなく、人間学的にアウグスティヌスの考えを分析していきたいので、神学を取り除いた場合、アウグスティヌスはどう答えるか、彼の考えに沿って第三章で答えを出すことを試みる。

また、未来についても、一般的に未来というものは不確定である。「明日は 15 時から会議がある」、たとえばこの期待は実は間違った情報によるものであって、実際は、翌日 13 時から会議が始まる、ということも日常で十分ありうることである。このような場合、期待と実際に起こる現実の未来との間で食い違いが発生する。これは、期待が未来に対応し、未来を表しているとはいえないのではなかろうか。また、そうであるとしたら、アウグスティヌスのこの議論は失敗なのであろうか。アウグスティヌスはこの問題に関しても、神の全知で答えるかもしれないが、この未来についての疑問も、第三章にて神学を除いて解決を試みる。

第三章　時間はなにによって測られるのか

第一節　魂（anima）のうちで測る
――幅を持たない時間の解決、刻まれた印象（impressio）

第一章で、運動は時間によって測られるということが明らかになった。では、時間は、どのようにして測られるのであろうか。アウグスティヌスは、時間を魂（anima）の延長として捉え、魂のうちで時間が測られると考えた。アウグスティヌスは、過去・現在・未来がそれぞれ存在するということも、過去・未来は存在しないということのどちらも厳密には正しくないとした。そして、三つの時間、過去のものの現在、現在のものの現在、未来のものの現在が存在するというのが正しいとした上で、次のように述べている。

「じっさい、これらのものは心のうちにいわば三つのものとして存在し、心以外にわたしはそれらのものを認めないのである。すなわち過去のものの現在は記憶であり、現在のものの現在は直観であり、未来のものの現在は期待である」[26]。

過去のものの現在、未来のものの現在とは、現在に存在するものとしての過去、現在に存在するものとしての未来という意味であろう。第二章でも述べたように、前者は過ぎ去るときに痕跡として残された記憶、後者は現在に兆候や、意思として現れる期待というように表され、両者とも、魂に刻まれた印象である。そして、魂のうちで現在に対応するもの、つまり現在のものの現在は、直観（contuitus）である。これら記憶、直観、期待は、魂のうちに刻まれた印象として、我々の心の中に共に現在的に存在するものである。

我々は魂のうちに存在するこの印象同士を測ることで時間を測っているということである。印象は、記憶も直観も期待もすべて現在的に存在するので、運動し始める始点を記憶として魂のうちに刻み込み、残しておくことができ、その始点の記憶と終点の直観との間を測ることができる。そのため過ぎ去っているときに始点と終点を知覚できる。よって、時間を計測できる条件が揃っているので魂のうちに刻まれた印象同士を測ることで、時間の計測が可能となる。よって、そもそも我々が時間を計測し、幅のあるものとして考えているのは、この魂によってであるということができる。

第二章では、現在は幅を持たなく、一瞬のうちに過ぎ去って存在しないものとなるので、

---

[26] Confessiones XI.20　sunt enim haec in anima tria quaedam, et alibi ea non video: praesens de praeteritis memoria, praesens de praesentibus contuitus, praesens de futuris expectatio.

計測することはできないという結論が出たが、前述したように印象同士は、すべて魂のうちに現在的に存在するので、過ぎ去って消えてしまうことはない。少しでも延びている時間は、過去、現在、未来と分かたれ、それぞれ記憶も直観も期待として魂のうちに刻まれるので、その中で幅を持つことができ、計測できるということがわかる。

アウグスティヌスは、我々はこのようにして、過ぎ去っていくときに魂に刻まれた印象を測ることによって、時間を測っているという結論を導き出した。そこにはどのような意味があるのであろうか。

アウグスティヌスは、魂において時間を測ると考えているので、この時間は心のうちに存在し、心により測定される内的時間であるといってよいであろう。これまでの考えをたどると、アウグスティヌスは、時間というものは、魂なしで存在するような外的な現象ではなく、魂と密接に関係した内的な現象であると考えられる。そもそも、過去・現在・未来という概念自体が魂によって認識されるものであるので、魂がなければ成り立たない。よって、時間は、過去・現在・未来から成り立っているので、魂がなければ成立しないのである。ということは、アウグスティヌスの理論で考えると、時間というものは、我々の主体的な関与がなければ、感じられない、または存在すらしないものであると考えていると見られる。

このような我々の魂のうちにおける時間を、内的時間と表現しているが、アウグスティヌスがこれらの時間のほかに、我々の外部にある外的時間というものがあると考えているかといえば、それは違うであろう。アウグスティヌスは、「･･･だれもわたしにむかって、天体の運動が時間であるといってはならない」[27]「･･･いかなる物体もただ時間において動く･･･」[28]など、あくまでも時間は魂によってのものであって、魂の外部である物体の側には存在しない、時間によって物体の運動を測っているとしている。つまり、時間というものは、内的時間がすべてであり、客観的時間のような外的時間は存在しないと考えていると思われる。我々人間の魂による内的時間のほかにあるのは、神の永遠性だけなのである。アウグスティヌスにとって、時間とは、人間にとっての時間と神における永遠性の二つだけなのである。

我々が、魂において、時間のうちにある自分というものを意識し、今までの行動を記憶によって自覚し、今現在何をしているかを直観によって自覚し、これから何をするかを期待によって自覚する。この一連の行為が魂の中で行われることにより、それぞれバラバラであった過去・現在・未来が連続性を持ち、知覚は継続し、時間の連続関係を意味のあるものとして理解できるようになる。アウグスティヌスは、時間概念とは、人間の存在なしでは、考えることができない、存在しないものであると考えていると思われる。

第二章第一節で、世界は一瞬一瞬バラバラで、知覚を持続させることが不可能になると

---

[27] Confessiones XI.23　nemo ergo mihi dicat caelestium corporum motus esse tempora
[28] Confessiones XI.24　nullum nisi in tempore moveri audio

いう問題が出たが、魂と時間の持続の知覚を関連付けて説明すれば解決できる。金子晴勇は、次のように述べている。

「……時間の持続が魂そのものの本質と関係していること、魂が多様性において統一を保つ多的な一であることにこの持続は基づいている……」[29]

「……過去が、「過ぎ去ったもの（複数）についての現在」（praesens de praeteritis）として自覚されるということは、そうした過去の出来事を生きた自己と今の自己とが同一のものであると自覚されることである」[30]

5 分前に棚にあった本、4 分前に棚から取り出した本、3 分前に机に置いた本、一瞬前の本、今目の前にある本それぞれが魂に表象として取り込まれ、そうした多様な表象が、統一され、5 分前の本を見ている自己と今の自己が同じであるということを自覚することで、知覚は持続し、過去の本と今目の前にある本は同じ本であるということがわかり、過去・現在という時間を把握することができる。

この節では、魂において時間を測るということがどのようなことを意味するのか、ということをアウグスティヌスの時間論から読み取り、論じてきた。では、実際に魂の中の表象を測ることで時間を認識するとはそもそも可能であるのか、可能であるとしたらどのような仕組みによるものなのか、第二節にて検討したい。

第二節　魂（anima）のうちで測るということの問題点とその解決

アウグスティヌスは、時間を魂のうちで測ると述べているが、魂により時間を測ることなどそもそも可能なのであろうか。

アリストテレスは、時間は運動によって測られるとし、その測られる時間は、魂によって気づかれるとした。だが、アウグスティヌスは、魂が印象を測ることによって、直接時間を測ると考えた。

「……わたしはあなたにおいて時間を測るのである。すなわち、事物が過ぎ去るとき、あなたのうちに刻み込み、それらが過ぎ去ったのちも残存する印象、すなわちこの現存する印象そのものを、わたしは測るのであって、その印象を刻み込むために測るのではない。時間を測るとき、わたしは印象そのものを測るのである。」[31]

---

29 『アウグスティヌスを学ぶ人のために』（139 頁）

30 『アウグスティヌスを学ぶ人のために』（140 頁）

31 Confessiones XI.27　tempora metior. affectionem, quam res praetereuntes in te faciunt,

この印象そのものを測るという行為が、時間を測っているといえるのであろうか。そもそも印象を測るというのはどのようなことであろうか。ある運動を始めてから、運動が終わるまでを測るとする。印象を測るとは、運動を始めたという記憶から、運動が終わったという直観（または記憶）までを測るということである。つまり、自分に体験された時間を、自分の内部で測るということであろう。

アウグスティヌスは、時間の計測の問題を、自分の中で時間がどのように体験されるかという問題に置き換えてしまったのではないか。時間を測るときには、基準が必要である。たとえば、より短い時間を基準にして、ある時間は、もう一方の時間の何倍であるというように表すことができる。しかし、自分に体験された時間は計測の基準となるものがない。つまり、自分の主観で時間の長さを決定してしまうのである。たとえ五分であっても、その時間が長いと感じたら長い、短いと感じたら短いというようになってしまう。これは明らかに実際の時間とは程遠いものである。これでは時間を測っているとは言えないのではないであろうか。

しかし、このような批判点によってアウグスティヌスの時間論は失敗に終わったとしようとするのは、間違いである。まず、批判の切り口自体が誤謬に満ちている。アウグスティヌスは、時間の計測の問題を、自分の中で時間がどのように体験されるかという問題に置き換えてしまったということだが、第二節で論じたように、そもそもアウグスティヌスが時間論において念頭に置いたのが、「体験の時間」である。片柳は次のように述べている。

> 「過ぎ去りとしての外的世界から、魂の広がりとしての内への転換は、外と内という二つの場所、領域の一方から他方への移動ではない。そうではなくわれわれが世界に関わる根本的な態度の変換であると言えよう」[32]。

アウグスティヌスは、私の過去・現在・未来というように一貫して、内的な時間について言及してきた。アウグスティヌスは、外から世界に生きるものとして人間を考えているのではなく、内側から世界を生きる、変化の内側にいるものとして人間を考えているのであろう。よって、客観的時間、外的時間を主観化したのではない。片柳はこのことを次のように表現している。

---

et cum illae praeterierint, manet, ipsam metior praesentem, non ea quae praeterierunt, ut fieret; ipsam metior , cum tempora metior.

32 「変化の自己化としての時間」（118 頁）

「時間を川の流れのように川の外に立って眺める立場ではなく、時間の流れの直中に立って、過ぎ去りとしての時間の流れを「内」から生きるそのような場の発見であり……「魂の広がり」とは、自らが内から生きる世界そのものの広がりなのである」[33]

我々はなにものかを体験したときに、印象を刻み込むことで、その体験を外的なものではなく、自分のものとするのである。

また、アウグスティヌスは、客観的時間を認めていないので、時間の計測において、実際の時間とは程遠いなどということ自体が間違っている。そもそもアウグスティヌスにおける時間の計測とは、記憶・直観・期待といったような魂の中だけに存在するもので行われている。そして、内的時間のほかには時間はない、魂で認識されて始めて時間というものが生まれるのであると考えているであろう。よって、そのような批判はまったく意味をなさないということがわかる。

時間を測るには基準が必要であると述べたが、では、魂における時間の計測の基準とは何であるのか。アウグスティヌスは、二十三章で、時間はある種の「拡がり　(distentio)」であるとしている。魂によって時間を測るとは、刻まれた印象を魂の拡がりに基づいて計測しているのである。この魂の拡がりこそが時間を測る基準であるといえる。これについて、辻内は測定基準としての時間を、魂の拡がり（distentio animi）として保持し、印象（affectio）は、測定対象としての時間であると述べている。辻内によると、魂の拡がり（distentio animi）は、心が過去・現在・未来へと分散することであり、印象（affectio）は、心の中に流れ込んだなんらかの測られるものである。[34]

心が、過去・現在・未来へと拡がり、過ぎ去らず、存在する時間になることで、それを基準として、流れてきた印象（affectio）を、魂のうちで現在的に測ることができるのである。

第二章第三節で出てきた、記憶の問題について、これまでわかってきたことをもとに、考えてみたい。過去は、記憶として保持していなければ存在しなかったことになるのであろうか。そうではないであろう、忘れてしまっていても過去にそのような出来事があったという事実は消えない。ではどのようにして現在に存在するのであろうか。

たとえば、我々が意識し、把握している記憶は、記憶全体の一部に過ぎないと考えたらどうであろうか。今意識していない、忘れてしまった記憶も、消えていったわけではなく、魂の中に蓄積され、印象として存在している。我々は、その時々によってその中から必要な印象を記憶を取り出しているのである。彼は、財布をおいたことを忘れたとしても、家に帰ってかばんの中を見たとき、財布がないことに気づき、多様な印象の中から財布を座席に置いたという印象を手繰り寄せ、思い出すこともできるのである。

---

[33] 「変化の自己化としての時間」（120 頁）
[34] cf.「アウグスティヌス『告白』11 巻の時間論について」（65 頁）

アウグスティヌスは、体験したことがすべて、印象として、魂に刻まれ、その刻まれた印象同士から、時間間隔を把握していると考えているので、仮に思い出すことができないようなことがあったとしても、魂の奥深くには、記憶という表象として刻まれていると答えるのではないか。

また未来についての問題もこれまでわかってきたことから答えを導き出したい。期待というものは、魂のうちに刻まれた自分の内部のものであるので、期待は客観的な事実ではなく、主観的なものである。期待は、そもそも現在に見られる少ない情報をもとに、魂の中で作り上げた表象なので、実際の未来の世界と自分の魂の中の世界は違うものである。

これはアウグスティヌスの考えを受けての私の考えであるが、期待に関しては、まだ実際に経験していないため、過去のように、意識していなくてもすべて魂の中にあるものではないのではないか。記憶・直観は、実際の過去・現在を基にして、それらをほぼそのまま写しているということができるかもしれない。記憶も直観も期待も魂の中にあり、われわれの主観が入った内的なものなのである。しかし未来に関しては、過去や現在とはまったく違う性質を帯びているのではないか。過去は、もうすでに経験したが今はもう存在しない。未来はまだ経験していなく、かつ、まだ存在しない。未来はまだ存在しなく、我々も経験していないので、期待と実際に起こる現実の未来が違うものであっても、それは当然のことであり、特に問題はないのではないか。しかし、過去・未来、この二つをアウグスティヌスは同じように扱っているようにみえる。この点については深く考察することができなかった。

本論文では、魂の中で時間を測るということがどのような意味を持つかについて注目し、論じてきた。アウグスティヌスは、一貫して、我々人間の内部で感じられる内的時間について論じている。それは、われわれ人間の魂が存在しなければ、時間は存在しないという理論によるものであった。アウグスティヌスの時間論を扱うには、彼は、一貫して内的時間について論じているのであり、その立場こそが根本的なものとみなしているのであって、実際の時間の議論を、誤って我々にどのように体験されるかという議論に置き換えてしまっているのではないという点に留意する必要があるであろう。

〈参考文献〉

St. Augustine's Confessions II, with an English translation by William Watts, 1631, in Loeb Classical Library, 1912.

聖アウグスティヌス『告白（下)』服部英次郎訳、1976 年、岩波書店

中山康雄『時間論の構築』2003 年、勁草書房

アリストテレス『自然学』、出隆・岩崎允胤訳『アリストテレス全集３』1968 年、岩波書店

金子晴勇『アウグスティヌスを学ぶ人のために』1993 年、世界思想社

金子晴勇『アウグスティヌスの人間学』1982 年、創文社

片柳榮一「変化の自己化としての時間―アウグスティヌスの時間論の再検討」『人間存在論』第 9 号 2003 年、113 - 122 頁

辻内宣博「アウグスティヌス『告白』11 巻の時間論について―distentio animi と affectio を巡って」『中世哲学研究』第 23 巻 2004 年、62 - 76 頁